

季刊

BEST DOCTORS IN JAPAN™

第37号 2017年 4月

今月の
ベストドクター

榊原記念病院
副院長 心臓血管外科主任部長

高梨 秀一郎

諦めない——その覚悟で年間400例の 心臓外科手術を行い、7000人の命を救う

わが国で一番の心臓外科手術件数で知られる榊原記念病院。その実績を支えるのは高梨先生率いる心臓血管外科、そして循環器内科の医師やメディカルスタッフたちだ。スペシャリストで構成される百戦錬磨のハートチームが存分に本領を発揮するための環境づくりと、高梨先生のモチベーションの背景を探った。



榊原記念病院 副院長／心臓血管外科主任部長

高梨 秀一郎 たかなし・しゅういちろう

1984年愛媛大学医学部医学科卒。兵庫医科大学胸部外科臨床研修医、関西労災病院心臓血管外科臨床研修医、財団法人心臓血管研究所附属病院外科研究員などを経て、93年大阪市立総合医療センター心臓血管外科、99年同センター同科副部長、2001年医療法人社団三記東鳳新東京病院心臓血管外科部長、04年財団法人日本心臓血管研究振興会附属榊原記念病院心臓血管外科部長、06年同病院同科主任部長。12年より現職。日本外科学会、日本胸部外科学会（評議員/教育施設協議会副会長）、日本心臓血管外科学会（評議員）、日本冠動脈外科学会（理事）、日本冠疾患学会（理事/編集委員会委員長）、日本循環器学会、日本心臓弁膜症学会（世話人）、日本Advanced Heart & Vascular Surgery/OPCAB研究会等に所属。

24時間体制のチームワークで 手術に向き合う

心臓の血管が詰まる、弁がうまく働かない……。全身に血液を送る心臓に不具合が発生すれば、人は生命の危機に直面する。高梨先生が率いる榊原記念病院心臓血管外科は、十分な準備の上で行う定時手術だけでなく、大動脈瘤破裂や心筋梗塞など、文字通り一刻を争う救急手術にも24時間体制で向き合っている。的確な判断と確かな技術、循環器内科医や看護師、麻酔科医、臨床工学技士らとのチームワークで心臓を救う。

この日、朝7時からハートチームによるカンファレンスが行われていた。間もなく手術が始まる患者さん

の病状や術式などの最終確認を行いながら、スタッフ間で情報を共有する。画像診断の技術が進み、鮮明な映像が手に入るとはいえ、実際には開胸してみないと分からないこともあるという。決して慢心せず、謙虚に分析する。分かっていること、分かっていることを明確にして積み重ねることが、患者さんを救う手術につながる。

3時間に及ぶ2つの手術を淡々と

カラコロと軽快な足音が廊下に響く。手術着には一見不釣り合いな、年季の入った下駄を履いた高梨先生が手術室に入ってきた。手術用ルーペ、滅菌されたガ



毎日早朝または夕方に行われるカンファレンス。一人ひとりの患者さんの画像をチェックし、所見や治療方針を検討する。

ウンを身に付けて準備を整えながら、看護師たちに気さくな笑顔で話しかける。自分の役割を心得たプロフェッショナルたちが仕事をこなす空間。互いの信頼関係が漂う。交わす言葉も最小限だ。

手術の中盤にさしかかり、少し空気が動いた。「弁、用意して」。開胸して確認できた状態では、弁を形成しても機能が十分に回復しないと判断。すぐさま看護師が指示された人工弁を用意する。そしてまた手術が続いた。

この日の1例目は大動脈弁形成術、2例目は僧帽弁形成術である。それぞれ3時間に及ぶ2つの手術を、高梨先生は休憩も挟まずに淡々と終えた。手術の報告書を書きながら「この下駄、重心を自在にコントロールできるんですよ。まっすぐ立つにはこれが一番。立ちっ放しで腰を傷めていましたが、これに出会って楽になりました。怪我でもしたらどうするんですか、と看護師さんに怒られるけど、手放せない」と笑った。

この日の手術は2例だが、もう1例入ることも珍しくないという。まさに激務だ。

とにかく患者さんを受け入れよ。 外科医の都合は聞くな

緊急の患者さんは24時間いつでも受け入れる——。患者さんにとってこれほどありがたいことはないが、実現は簡単ではない。ベッドの空きやスタッフの確保など、さまざまな障害があるのが普通だ。

その点、榊原記念病院は循環器専門病院であるため、交通事故や出産など、緊急を要する他科の患者さんとバッティングし「どちらを受け、どちらを受けないか」と葛藤することはまずない。また4つの手術室全てが心臓外科手術のために使用でき、循環器内科医、自ら執刀できる心臓外科医、それを支えるメディカルスタッフが常に待機している。「常時3チームは動かせる体制が整っています。また、CCU（心臓血管疾患集

中治療室)の救急窓口当番には、外科医の都合は聞かず、とにかく受け入れるよう言っています。できるだけ万全な状態で臨めるようにするのが外科医の仕事です」。高梨先生のその言葉に、どんなことがあっても患者さんを救うという意気込みが滲んでいる。

一人ひとりの患者さんに最適な治療を

現在、循環器疾患に限らず、治療は患者さんへの負担が小さい低侵襲性が求められている。外科としては、傷を小さくする、手術時間を短くする、出血量を少なくする——などで低侵襲を目指す。穿孔の穴だけで済む内科のカテーテル治療にはとても及ばない。しかし当然ながら、治療法は侵襲の大小だけで選択されるべきではなく、根治性や治療後の生活の質など、長期予後こそが大きな指標となる。

「患者さん一人ひとりの病態や体力、さらには社会的な役割や本人の価値観など、さまざまなことが考慮されるべきです。例えば、本当は手術が望ましい患者さんであっても、非常に多忙で手術の日程すら取れないような人の場合、とりあえず薬でコントロールしたり、一時的にカテーテル治療を施し、時間に余裕ができるまでつなぐといった選択もあります」。患者さんにとって重要なのは、病気の治療や社会復帰だ。「内科と外科が密接に連携し、ハートチームとして一人ひとりの患者さんに応じた多彩な治療メニューを提示できるのも、専門施設としての強み」と高梨先生は語る。

互いを知り、尊敬することでチーム力が向上する

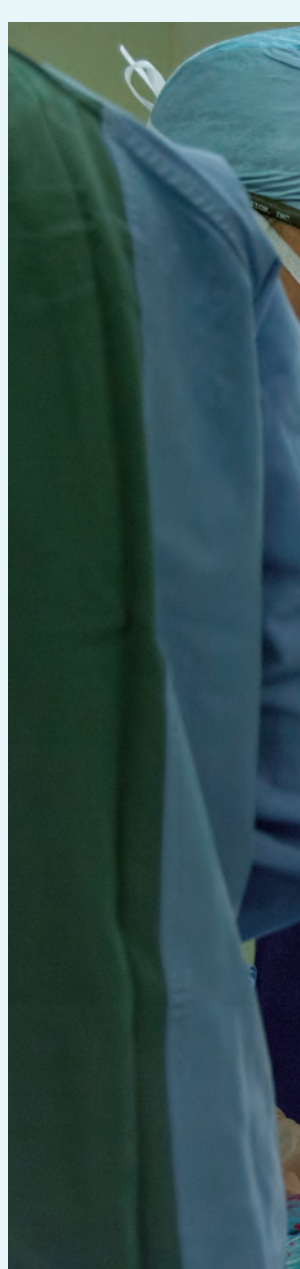
ハートチームを運営する上で、高梨先生が取り入れている「クロスラーニング」というユニークな研修がある。心臓外科医と循環器内科医、看護師、臨床工学技士、事務スタッフなどが互いの手技を経験し、専門領域をまたいで学び合う。最近では、陸上選手が水泳のトレーニングをするなど、アスリートも「クロストレーニング」を行っている。本来の競技に必要な能力だけでなく、筋力や心肺機能、持久力や瞬発力など全

体の向上を目指すためだ。クロスラーニングは、いわばその医療版である。

例えば医療連携室の事務スタッフが手術をより深く知ることによって、運ばれてきた患者さんの緊急度をよりの確に実感でき、より正確な優先順位で紹介先を判断できるようになる。また、自分の手で実際に点滴の準備をしてみたり、動物実験で皮膚や骨にメスを入れるといった体験を経ると、それまでの「知識」が単なる情報から新たな意味を持ち、その人の血肉となっていく。「逆に僕らが看護師さんからベッドのケアを学んだり、循環器内科医からカテーテル治療のコツを教わったりすることもあります。この研修では、みんなが目をキラキラさせていますよ。新しい発見があるんでしょうね」

相手の仕事に興味を湧くと思いやりが生まれ、杓子定規ではない判断ができるようになり、チームが柔軟で適応力のある組織に育つ。「1+1が5にも6にもなるんです。相手を認め尊敬できると、協力して一つのことを成し遂げようというモチベーションが高まります」と高梨先生はクロスラーニングの意義を強調する。

高梨先生がこの研修を採用するようになったのは、以前勤務していた病院での経験がきっかけだった。同僚の循環器内科医から手術後の評価をしてもらうなど、切磋琢磨して生まれた信頼関係は、互いにより刺激を与えた。「僕は一流の心臓外科医になるには、一流の循環器内科医の存在が不可欠だと思っています。我々は手術をします。そのためには循環器内科医による診断が必要で、彼らのリクエストに応え、信頼に足る心臓外科医になる必要があります。厳しい目で見て



執刀する高梨先生（中央）。年間300～400例に及ぶ手術を行い、7000人も命を救ってきた。



くれる循環器内科医は、僕らを育ててくれます。彼らからきちんとした評価を得られる手術であれば、患者さんの予後も良くなっていくはず。そのために腕を磨くのです」

年間300～400例の外科手術。 7000人の命を救ってきた

高校時代は農学部に行きたいと思っていた。「土が好きでした。土に根を張る植物の生命力ってすごいでしょ。でも父も医者で、医者しか見てこなかった自分には、他の職業は務まらないなと思って医学部へ進みました」。心臓を選んだ理由を伺うと「頭のいい人は、覚えることの多い内分泌科など実質臓器の科に行く。でも僕はそれが苦手で、シンプルな管腔臓器、とりわけポンプと弁だけで究極のシンプルさの心臓を選びました」と笑う。初めは循環器内科医になるつもりだっ

たが、研修医時代に見学に行った心臓外科の先生から「心臓外科医になったところで、いいことは何もない。金も名誉も時間もない。ないない尽くしだ。なりたいやつの気が知れない」と言われ、「自分にはなってるじゃないか。これは絶対嘘を言って



手術で立ちっ放しの高梨先生にとって、下駄は欠かせない道具の一つだ。



担当医と一緒に病床を回り、患者さんの様子をうかがう高梨先生。

るなと思って外科に転向したのです」。大先輩の裏をかいたつもりで飛び込んだ世界。「なってみたら、その通りでした（笑）」。しかしその後、高梨先生は年間300～400例の手術をこなし、7000人を超える患者さんの命を救ってきた。「やりがいはありますよね……」としみじみと語った。

手術室の天井にいる、 自分を見ているもうひとりの自分

胸を切開して心臓を露わにし、血管を切って繋げる。心臓を止めさえもする。そんな心臓外科の世界を、高梨先生は「頭が良くて切れ過ぎるタイプには向かない」と言う。「機転が利いて先の計算ができ過ぎると、自ずと楽な展開に進んでしまう。そうではなくて、先が見えなくても手が動くことが必要なんです」。手術をしていると、ごくまれに、どうしていいのかわからなくなることもあるそうだ。出血が止まらない。癒着がひどくて、どこをどう剥がしていいのかお仕上げの状態……。「そんなとき、天井の上からもうひとりの自分が見ていると感ずることがあります。すると自然にスッと手が動き、あ、こうすればいいんだと気付くのです」

切羽詰まりながら、これまでに積んだ知識と経験を総動員し、悩みに悩んだ究極の瞬間に、解決策が降りてくる。「きっとカテコラミンが全開になっています。そんな環境は通常の生活ではめったにないかもしれないけれど、手術をしているとよくあります」

視野の不思議についてもこう語る。「冠動脈の手術で用いるルーペは5.5倍。弁膜の手術用は3.5倍。術野に集中し、

それ以外は遮断されて視野は狭くなっているはずなのに、むしろ周囲はよく見える。いや感じる。“意識の視野”とでもいうのか、空気の密度に敏感になって、『近くで何かあったな』と切迫感のようなものを肌が感じると、患者さんの血圧が低下してたりします。五感がモニター代わりに働いているのかもしれない」。だからこそ、医師や看護師をはじめ手術室に入るスタッフたちには「術者の心に沿った気持ちでいてほしい」と高梨先生は言う。

究極の決断を見せてくれた恩師

そんな高梨先生がメンターと仰ぐのは、関西労災病院での研修医時代に出会った清水幸宏先生（現石切生喜病院顧問）である。

ある動脈瘤の手術のこと。人工心肺で血液を体外循環させるこの手術は、血液が凝固しないようヘパリンを投与する。だが出血量が多いと、人工心肺の血液を回収しても輸血が間に合わなくなってしまう。人工心肺を止めてヘパリンを中和し、止血すべきか。回し続けて血流を確保すべきか。ぎりぎりのせめぎ合い。「その時、清水先生は人工心肺を止めさせ、指で患者さん

の動脈をグッと押さえ、それで何とか出血が止まりました。もしあのまま人工心肺を回し続けても、出血多量で助からなかったはず。ものすごい決断でした」。恩師が見せた決断を一番の印象に挙げた。

「じっと見ろ！」という言葉も心に残っている。心臓手術では、患者さんの体格や脂肪の付き具合など、さまざまな要因で目当ての冠動脈が目で確認できないことがある。そのとき清水先生からは、ただ「じっと見ろ！」とだけ言われた。「繊細に観察を続ければ、どの位置にあるか分かってくる。心を落ち着かせろ。そしてこれまでの経験に照らして、しっかり想像しろという意味だったのです」と、高梨先生は恩師の言葉を振り返った。

諦めない。それが名医

最後に、高梨先生にとって名医とは？ と伺うと、少し考えてから「諦めないこと」と答えてくれた。「リ



盟友である麻酔科部長の清水淳先生(左)と共にモニタをチェックする高梨先生。

スクが大きくても引き受ける責任から逃げないこと。重症例であればあるほど、一つの判断に妥協があると後で大きくなって返って来ます。諦めないとは、甘えないこととも言えるかな。もし自分の中に一抹でもそうした気配が見えたら、それはメスを下ろし、外科医を辞めるときですよ」

全身に漲る凜とした覚悟が感じられた。■



心臓血管外科の医師たちと一緒に。24時間体制で患者さんを受け入れ、最高の手術と治療の提供を目指す頼もしい仲間たちだ。

日本におけるベストドクターズ・サービスはBest Doctors, Inc.ならびに同社の日本総代理店である株式会社法研により運営されています。

● ベストドクターズ社について

ベストドクターズ社（本社：米国マサチューセッツ州ボストン）はハーバード大学医学部の教授2名により、「病に苦しむ方々が最良の医療を享受できるように」との理念の下、1989年に創業しました。弊社は現在、本社のある北米をはじめ、中南米、ヨーロッパ、オセアニア各国で事業を展開。日本には2002年に進出し、重篤な疾患で苦しむ方々への「ベストな医師＝Best Doctors in Japan™」のご照会を柱に活動しています。



● 株式会社法研について

法研は1946年に設立され、社会保障の情報発信事業を起点にその領域を拡大し、健康・医療・社会保障をはじめ、年金・介護・福祉など幅広い分野で良質な情報・サービスを提供してまいりました。永年にわたり培われた信頼と実績をもとに、みなさまの「健康寿命」の延伸と「クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）」の向上を積極的に支援しています。



ベストドクターズ記念楯

ご選出記念楯へのお問い合わせを多々たまわり、誠にありがとうございます。予想を超えるご反響をいただき個別のご案内が難しい状況のため、本誌にて概要をご案内させていただき運びとなりました。

お問い合わせ、ご購入につきましては、お手数ですが、下記メールアドレス宛にご連絡ください。折り返しご案内をお送り申し上げます。なお、記念楯は過去のご選出年度（2014-2015、2012-2013、2010-2011、2008-2009、2006-2007）のものも別途お承り可能です。

【仕様】木目調枠 縦約33cm×横約28cm 重さ約1kg 【価格】2万8,000円（送料・税込）

【納期】お申し込み後8週間程度

氏名欄に記載する肩書き、学位は「Dr.」「M.D.」「M.D., Ph.D.」等からご選択いただけます。

e-mail : tate@bestdoctors.jp (bestdoctorsには末尾に「s」がつきます)



本誌『BEST DOCTORS IN JAPAN』のバックナンバーがご覧いただけます。 <http://www.bestdoctors.jp/about-best-doctors/news-and-events>



Best Doctors, Inc. (ベストドクターズ米国本社)
60 State Street, Suite 600, Boston, MA 02109 USA
Tel: +1(617)226-3666

ベストドクターズ社 (Best Doctors, Inc.) は、1989年にハーバード大学所属の2名の臨床医によって設立されました。今日では、世界30カ国、3000万人以上の方々に、おもに生命保険会社、損害保険会社、企業等を通じてご加入いただいております。

Best Doctors、star-in-cross ロゴ、ベストドクターズ、Best Doctors in Japan は米国およびその他の国における Best Doctors, Inc. の商標です。

本誌は著作権法上の保護を受けています。本誌の一部あるいは全部について、株式会社法研および Best Doctors, Inc. から文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で複製、複製、転載することは禁じられています。

ベストドクターズ社日本総代理店 株式会社 法研
〒104-8104 東京都中央区銀座1-10-1 Tel.03(3562)8404